

新型コロナウイルスをめぐる福祉文化問題

藺田碩哉

2020年初頭にはじまった新型コロナウイルスの蔓延は、瞬く間に世界を駆け巡り、先進国と途上国とを問わず、市井の人々の生活と各国の経済と政治に甚大な影響を与えつつある。コロナ禍によって今日の世界がいかに緊密に結びあわされているかが如実に示される一方、コロナウィルスはグローバルな規模で人と人とを分離させ、その関係を打ち壊すように作用している。この事態を前に世界中の人々は自分と世界に関わる広くて深い問題の前に立たされている。

【コロナ問題の広がり】

はじめにコロナ禍がいかに広範な問題提起を迫るものであるかをいくつかの面から確認しておこう。

●コロナと日常生活

コロナ禍は、生活インフラに関わる仕事、食料と日用品、配送業や医療と福祉のサービス以外のあらゆる仕事を休業に追い込んだ。会社も官庁も学校も閉ざされ、社交空間からは閉め出され、公共施設の大半が利用不可能になって、多くの人々は突然降って湧いた「コロナの休日」の前に呆然として立ちすくんだ。そこで否応なく突き付けられているのは家庭と近隣の見直しということである。

- ・家族とともにある時間の意味と価値を思い知らされた。家族関係が悪ければコロナの休日は地獄になる。家庭の健康維持は最重要の課題となった。
- ・家庭内で楽しい時間をつくれるかどうかQOLを決める。テレビとゲームだけではもたない。家庭の文化度が問われた。
- ・身の回りにある公園の価値が分かった。
- ・公共施設は何のためにあるのかを真剣に考えさせられた。その運用についてもさまざまな問題が見えてきた。
- ・近くにある自然、都市近郊の里山がいかに重要な存在であるかが実感できた。

●コロナと日本社会

世界の国々を襲ったコロナ禍は期せずしてそれぞれの国の特徴や問題点をあからさまにしてくれた。

- ・政府の無能：各国の対応策と比べてわが政府の混迷ぶりは際立っていた。「安倍の耐えられない軽さ」には呆れるばかりであった。
- ・マスクの役割の重要性：政府の監視と批判こそ新聞・テレビの任務であることに市民は改めて気付かされた。
- ・自治体の存在感：市町村や都道府県がどんな役割をどう果たすかが見えてきた。テレビ出演の増えた知事の品定めが出来たし、町の広報や窓口の対応などによって市政や市長の真価も明らかになりつつある。
- ・日本は欧米のように法律で強制しなくても、外出「自粛」が徹底した。お上の指示には従うという伝統的従順さとともに、従わない奴に対する監視の目＝世間の目が張りめぐらされて行く感じがあった。道行く人のマスクの上から覗いている厳しいまなざし—これこそが世間の目であると思知らされた。
- ・感染者数は比較的には少なく推移している。これはそもそも検査数が少ないという面もあるが、清潔好きな国民性で手洗い、うがい、マスクが日常的に行われてきたこと、他者との身体接触に淡白であることも一因だろう。根底には神道の「払いたまえ清めたまえ」の穢れ思想に繋がる民俗が無視できない。

●観光レクリエーションを問い直す

日本経済において観光レジャーの持つ大きな位置が見えてきた。コロナ禍で外国人観光客が激減して、インバウンドによる稼ぎの大きさと重要性に改めて気づかされた。

- ・観光なくしてこれからの日本はない。

中国1000万、韓国600万、台湾500万（2019年）の訪日外客が消えれば、航空会社、鉄道、バス、レンタカー、ホテル、旅館、土産物屋から飲食店に至るまで、日本の観光業は壊滅的な打撃を受ける。

- ・倒産する老舗旅館が相次いで、これらの日本的文化資産も外客に支えられていたことを思い知らされた。どうすれば日本的観光資源を支えられるかという工夫も始まり、宿泊券の事前販売などの試みが生まれた。
- ・パチンコ店のレゾンデートル（存在価値）が明らかになった。世にはパチンコでストレスを発散し、生きる望みをパチンコにかけざるを得ない人が数多存在する。
- ・レジャーランドはもとより、野球やサッカーなどのスポーツ施設、動物園や水族館、博物館や美術館、さらには劇場、音楽ホール、映画館、ライブハウス等々の文化施設、カフェやバーや居酒屋まで、すべてが3密（密接・密着・密集）の空間で行われてきた。
- ・人間の楽しみは「3密」の中にある。3密のもとでこそ遊びは盛りあがる。これらを失うことがいかに味気ないものであるか。3密レジャーから脱した拡散型レクリエーションを生み出すことができるのだろうか。

●コロナと経済問題

コロナ禍はリーマンショックどころでない日本経済への大打撃をもたらしつつある。アベノミクスも破綻を免れないだろう。世界経済も長期にわたって停滞する。

- ・およそ迅速とは言い難いが中小企業への助成や家計への1人10万円補助が行われつつある。危機に臨んで政府は巨額の財政出動をせざるを得なくなった。このことは新自由主義的な緊縮—自由放任型政策の見直しと福祉社会政策の重要性を再認識させつつある。ベーシックインカムやMMTへの道も現実味を帯びてきた。
- ・他方、次のような「コロナ特需」への注目も集まっている。
 - ①マスクと消毒薬、医療機器…アベノマスクはとんだお笑い草だったが、普段は十分足りているように見える医療品があつという間に消えてなくなるのを目の当たりにした。実はマスクの8割が中国からの輸入だったという。嫌韓嫌中など言っている場合ではない。
 - ②ネットワーク用品…突如、在宅勤務が急増し、ノートパソコン、パソコンに装着するカメラ&マイクなどの需要が急増し、たちまち在庫が空になった。これらの製品の多くが部品を中国に依存していて増産ができないという事情も明らかになった。
 - ③「おうち」特需…「おうち」で時間を楽しむために必要な装置として「楽器」に人気が集まっているという。インテリアや装飾品、花なども従来の需要を大きく超える事態となっている。

●コロナと教育問題

全ての学校が突然の休校に追い込まれ、子どもたちへの学習補償をどう進めるかが課題になっている。オンライン授業をはじめ、学校外学習の見直しが進む中で、学校そのものの問い直しも問題意識に上がって来た。

- ・一斉授業ばかりが学習形態ではない。家で行う自学自習には、学校の埋め合わせ以上の意味があるのではないか。教師が押し付ける学習でない、自分で発見する学習の方が身に付くのではないか、そんな見方も出てきた。
- ・オンライン学習が持てはやされているが、その限界も見えてきた。改めて読書の価値が再発見されている。本を読むことは簡便にして有益かつ深遠な営みであり、タブレットで読書をすべて置き換えることなどできはしない。
- ・これからの子どもの教育は地域との関係を重視せざるを得ないだろう。地域の教育力を高めることが学校を改善することにつながる。
- ・大学をどうするかも大きな問いである。ネットで数百人の学生に一方的に情報を流したところでどんな「大学」教育が出来るのだろうか。9月入学制への転換を考える前に、大学の在り方そのものを問題にすべきだ。

●コロナ禍と環境問題

コロナ禍をもたらした背景には、地球規模で広がる環境破壊がある。グローバル資本による原生林の大規模伐採が、森の奥で野生動物とともに静かに暮らしていた未知のウィルスを人間世界に引き出し、拡散させた。ウィルスの蔓延は自然からの警鐘に他ならない。

- ・地球上のあらゆる生き物は細菌から人間に至るまでみな緊密に繋がっている。人間の生もこの壮大な命の連鎖の中にある。
- ・近代以降、特にこの半世紀、人間が自然に対して加えてきた破壊行為は凄まじいの一語に尽きる。CO2の増加による気温の上昇によって気候は荒々しさを増している。生活廃棄物による海洋汚染はとどまるところを知らない。コロナ禍はそれらのリアクションの一つと考えねばならない。
- ・ウィルスは人類が定住を始めたころから、人間社会の宿痾として人に取り付いてきた。天然痘をはじめ、ペストやコレラに代表されるさまざまな感染症は、常に人類とともにあり、人間の歴史を作る重要な素因の1つであった。ウィルスを撲滅することはできない。ウィルスとの穏やかな共生こそが唯一の道である。それには人間の社会の在り方、現代の大量生産―大量消費のあり方そのものを見直すしかない。
- ・都市周辺に残された自然地、人と自然がともに創り上げてきた里山の価値は計り知れない。大規模開発を見直し、緑豊かな国土の回復が急務である。

【コロナ禍が福祉に突きつけるもの】

コロナ禍は日常生活の背後にあって通常はよく見えなかったさまざまなことがらに気付かせてくれた。漠然と感じていたことを明確にもしてくれた。特に人間の幸福＝福祉を支えてきた隠れた諸条件への気づきを促されたと言える。

●コロナが露わにした「福祉文化」の視点

- ・第一番に浮かび上がって来たのはこの国の至るところに蔓延していた多種多様な「差別」の態様である。非正規雇用者があつという間に生活の基盤を失い、路上生活に陥る人も後を絶たない。外国人労働者は十分な報酬も福祉サービスも受けられず過酷な労働を強いられている（特に技能実習生という欺瞞的制度）。障がいのある人たち、乏しい年金で暮らしている高齢者、家庭内暴力にさらされている母親と子ども、それら弱い立場の人たちが広範に存在することをコロナは否応なくあぶり出した。
- ・それと同時に相互扶助への覚醒も生まれている。コロナによって分断されるからこそ結びあい、助け合わなくてはならないという意識も強くなる。アベノマスクが届くよりもはるかに素早く、マスクの手づくりの工夫が紹介され、ストックを持つ人からの拋出も行われた。友人知人に手づくりマスクを贈り合うという新たな福祉文化も誕生している。外国からの支援も活発になった。
- ・コロナが突き付けてきた重い問いがある。家族の一人でも感染したら、その人は隔離され、重症化すれば誰にも看取られず死なねばならず、葬儀さえも行えないという事態は衝撃的である。死にゆく人々を支えるという福祉文化の重要な営みもろくも破壊されようとしている。これにどう対処すればいいのか。

●医療・福祉従事者家への注目

コロナの拡大は医療現場に大きな負担をもたらした。医師も看護師も自ら感染する危険を冒して不眠不休の検査と治療に追われ、老人ホームの介護士は逃げ場のない3密の環境の中で高齢者を支え続けている。日本の医療の脆弱さが露わになり、民間主導の福祉サービスの危うさも浮き彫りになった。

- ・日本の医療の「ゆとり」のなさが明らかになった。感染者がもっと急激に増えれば医療崩壊は必至という状況だった。病院の空きベッドはこうした時の備えであるはずだが、経営効率が最優先でベッドの稼働率ばかりがチェックされる現在の病院経営では危機に対応できないことが明らかになった。

・高齢者のデイサービスや老人ホームにおいてもコロナ危機は深刻だった。3密にせざるを得ない施設における介護は、介護に携わる専門職の「命を懸けた」仕事によってかろうじて支えられている。ここでは専門職の劣悪な待遇が大きな問題になった。民間に委ねられた有料老人ホームの中には、空間的なゆとりが乏しく、職員の数も不足しているところも少なくない。福祉を「商売」にしたことの帰結である。

・保育施設においても同じ問題がある。登園自粛を受け入れられる家庭ばかりではない。親が働きに出なければ日々の暮らしが立ち行かない家庭では、子どもを受け入れてくれる場所を確保することは死活問題である。

●福祉現場での発想転換

コロナは日本の福祉文化の特質を露わにした。それは福祉サービスの主流が相変わらず施設収容型であり、与える福祉であり、集団主義的な運営が主流だという特質である。コロナ禍はこの日本の特質が感染症に対してきわめてぜい弱だという事実を改めて認識させてくれた。(クラスター感染)

・施設収容型福祉の見直しが求められている。訪問介護・看護・リハビリのように、福祉サービスの利用者の生活拠点へ出かけて行く福祉サービスがもっと拡大されていい。それは同時に、住まいの周辺における地域の「福祉力」を高めるという課題への取組みを促す。

・デイサービスや老人ホームの定番のプログラムである「福祉レクリエーション」についてもその偏りが露わになった。現在「レクリエーション」と言えば集会型・身体型かつ指導者中心型の「みんなで楽しく」が主流である。今後は、一人ひとりの遊び・趣味を支援する個別型プログラムが重視されるべきだろう。個人の意思を一人一人大切に「みんなが楽しく」なることが目指されなくてはならない。

・レクリエーションの充実のためには、プログラム開発ばかりでなく、レクリエーション環境を整備することが欠かせない。ゆったりとした空間や本やアートや音楽に触れることのできる場所や装置、生活の場に自然を呼び込む造園活動にも力を入れる必要がある。

●働き方改革への道…勤労者福祉

福祉の課題は子どもや高齢者だけのものではない。働く人たちの福祉＝勤労者福祉を忘れることはできない。コロナ禍が有無を言わず与えてくれた「コロナの休日」は、長時間労働、休日・休暇が貧弱な日本の勤労者の働き方に根本的な見直しを迫っている。

・在宅勤務を余儀なくされたサラリーマンの多くが「テレワークでも結構いける」と感じている。「一緒にいなくても仕事はできる」という確認は、セクハラ、パワハラの職場風土を変える契機になるかもしれない。

・オンライン会議も面白い。一人一人の顔をしっかり見つめ合いながら、精神を画面に集中して論じ合う体験が、マンネリ化した会議に活を入れる可能性は高い。

・働き過ぎからの脱出の道が見えてきた。職場とともに生活の2大拠点である家庭の価値を高めるのは余暇＝自由時間である。コロナ体験を契機に通常残業体質から脱し、週休2日制を徹底し(勤労者数から言えばいまだに6割)、有給休暇の完全取得(現在の取得率はおおむね5割、完全取得が当然の欧米との格差は大きい)を実現し、職場人+家庭人+地域人のバランスを確立することがコロナ対策の生活的な基盤を強化する。

●コロナと福祉政治

コロナ禍を機に世界的に強権支配への傾斜が高まっている。習近平の中国やトランプのアメリカは特に顕著だ。日本でもコロナを好機とみて非常事態法の整備から憲法の人権規定の見直しを画策する動きがあることを警戒しなくてはならない。このことはまた国家と社会福祉の関わりを根底から問い直す課題を提起している。

・コロナを巡る社会のさまざまな反応や政府の対応から浮かび上がってくるのは、現在の国家が社会福祉を制度化している根底にある哲学は「福祉は国家のセキュリティを保つためにある」という思想であ

る。自由競争から落ちこぼれた人々を救済したり、高齢者や障害者の生活を支えたりすることの意味は、それがなければ大多数のまじめな勤労者が生活に不安を感じ、勤労意欲を失い、社会の安寧と秩序が損なわれるという点にある。

・しかし、ヨーロッパに始まる近代の社会福祉思想の原点は、ルソーの天賦人権論に始まる個人の自由と平等の主張であり、また全ての人の人権を保障し合うための友愛と救済の実践である。コロナ禍で露わになった国家意思を根底から批判して**国家を守る福祉から個人の権利に立脚する福祉への転換を求めることが私たちの課題である。**

・感染症の蔓延に対処するために一定の社会統制が必要な事は言を俟たない。しかしそれは中央権力からの指令と命令によってしか実現できないものだろうか。地域の連帯を土台に市民の合意に基づく徹底した「自粛」の中で、相互に助け合いながらコロナをやり過ごすことができないはずはない。

・コロナは新しい政治思想を招き寄せる。これからの社会と政治のイメージとして例えば、共同体の復権を基盤とした相互扶助的アナーキズム（反国家主義）の再検討を上げることが出来る。（クロポトキン『相互扶助論』）

コロナ問題は今日の社会福祉のあり方に多角的な再検討を迫るものである。福祉文化研究が「社会福祉を対象とした文化批判」である以上、これは福祉文化研究の格好のテーマであることは言うまでもない。多くの論者とともこの問題を深掘りして行きたい。